青森県

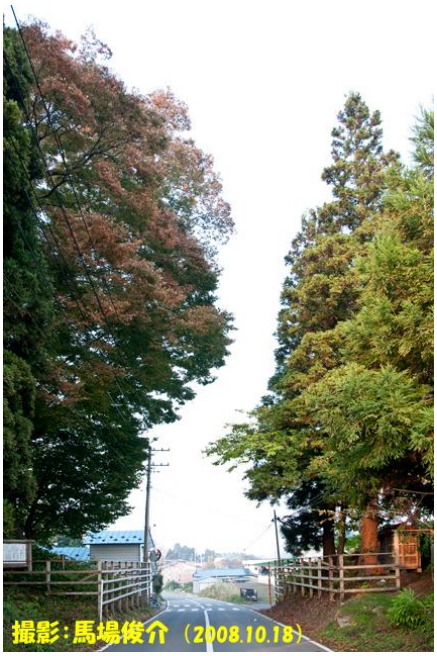
街道１

青森の街道遺産のトップは松並木で、平舘の松前街道松並木(外ヶ浜町、1660～80 年代、県史跡) A と百沢街道松並木（弘前市、江戸期、県天然）B がその代表である。特に平舘の松並木は 1.8 キロにわたって樹齢 300 年の松が途切れることなく並び壮観である。全国の松並木は松喰い虫の被害を受け、江戸期の松が不同間隔で生き残っているケースがほとんどなので、このように植栽された当時のままの状態で残る松並木は、松喰い虫の被害の少ない東北北端部だからこそ見られる貴重な風景と言える。

街道２

青森の街道遺産の二番目は一里塚である。東北 7 県に現存する一里塚はリスト上 183 基、全国では 414 基なので、44%が東北地方に集中している。一里塚の残存数は、本州以外では極端に減り、北海道 0、四国 5、九州・沖縄 12 となっている。一方、一里塚の保存状態を判断する上で一番重要な塚木の残存状態は、東北 7 県で 13 ヶ所(東北の一里塚の 7%)、全国で 37 ヶ所（全一里塚の 9%）と、東北が必ずしも高くない。これは意外な結果で、寒冷地で山間部だからといって塚木が残りやすくはならず、逆に人里にあった方が残りやすいことを示している。

以上は一般論で、ここから青森の一里塚について見て行く。県下の一里塚は 20 基、塚木は 1 ヶ所のみで比率は 5%と、一里塚の保存状態は悪い。救いは、天間舘一里塚（七戸町、江戸期、県史跡）A と市野沢一里塚（八戸市、慶長 9-承応 2（1604-53）、県史跡）B のように、塚が 2 基良好な形で保存されたものが存在し、かつ、樹齢 3 百年を超える見事な欅の塚木をもつ天間舘一里塚が、県下に 1 基でもいいから残っている点である。



街道３

恐山の田名部参道の丁塚石群（むつ市、安政 6－文久 2（1859-62））A は、日本三大霊場の一つ恐山のある下北半島ならではの重要な遺構である。恐山では文久 2 の千年祭を前に、安政 6 から町石の建立が始められた。総数は 124 基で、その中には松前の天屋善兵衛の寄進した町石が多くあるが、この人物は海産物や北前船と関係の深い豪商と推測されている。町石は 58 基まで減ったが、現在は後補され 124 基に回復している。

街道４

街道遺産の 3 番目は石敢當である。石敢當は、宮崎・鹿児島・沖縄の 3 県以外ではほとんど見られないが、それが県下には二系統、3 基も現存している。一系統は、弘前藩医・三上隆圭が江戸で得た知見を

元に建立されたと言われ、もう一系統は広船村外川家の八代目外川庸孝が、村の安穏を祈るため建立したとされる。何れも、石敢當の本来の設置目的（T字路・三叉路の魔除け）とは異なっている。3 基の中で最も有名なものは、全国で唯一三角形断面をした広船金森山の石敢當（平川市、幕末、市有形民俗）A である。

街道 5

最後の街道遺産は、海岸沿いを通る奥州街道が、南部藩と津軽藩の藩境となる二本又川と交差する地点に、川を挟んで 2 基ずつ計 4 基が築かれ藩境塚（野辺地町・平内町、正保 2（1645）以前、県史跡）A である。南部藩は、伊達藩との間に長大な藩境塚群を造り上げたが、津軽藩とも仲は悪く、この藩境塚も先に南部藩が築いたとされる。それにもかかわらず、正保 2（1645）と正保 4（1646）に作られた「陸奥國津軽郡之絵圖」と「陸奥國南部領國絵圖」で、前者にのみ藩境塚の記載があるのは、南部藩側のわだかまりの大きさを感じさせ興味深い。

舟運 1

陸奥湾東部の入江にある浜町の常夜灯（野辺地町、文政 10（1827）、町史跡）B は、港の灯明台としては小型だが、盛岡藩の日本海航路の重要な拠点として大豆・鰯〆粕・銅・海産物などが積み出され、木綿・塩・砂糖・紙・日用品などが搬入された。ただ、江戸への東廻り航路があるのに、なぜ大坂への西廻り航路としたのかは不明である。建立の世話人となった丸亀（香川）の廻船問屋・橘屋吉五郎の関与の経緯も不明（西廻りだから世話人となったのか、橘屋吉五郎が関与したから西廻りとなったのか）。

農業 1

青森を代表する農業遺産は三本木原開拓で、近代日本を代表する農学者・新渡戸稲造の祖父にあたる南部藩士・新渡戸傳が、生涯の目標とした大事業である。具体的には、三本木原の台地を灌漑するため、奥入瀬川の上流から用水路を引く難工事で、鞍出山穴堰 B（2.5 キロ）、天狗山穴堰 B（1.6 キロ）の 2 本のトンネルと陸堰 A（7.2 キロ）の水路は、南部藩第十四代藩主・利剛により「稲生川」と命名された（何れも十和田市、安政 5（1859））。現在、ほと

んどがコンクリートで改修されてしまったが、十和田市街地に入る部分で流速を落とすため幅を 2 倍に拡幅した構造は、当初の形態を留めている。

農業 2

西津軽地方の新田開発のため、津軽藩第四代藩主・津軽信政の命を受け、普請奉行・樋口権右衛門が築いた廻堰大溜池(鶴田町、寛文 4(1664)) Ⓐ は、東側の半分が皿池状態になっていて、そこに延長 4.1 キロの近世最長の堰堤を見ることができる。津軽富士見湖をバックに広がる広大な水面も美しい。

漁業 1

青森には全国でも珍しい漁業遺産がある。大久喜の浜小屋（八戸市、江戸末期、国有形民俗）A がそれで、かつてはこの付近の海岸でよく見受けられ、漁撈用具の収納、漁具の修理、漁の忙しい時期の宿泊場所にも用いられた施設である。文化財指定は 1000 点を超える各種漁具・漁船に関わる作業道具と一括であったが、そのもとになったのは大久喜浜・法師浜の漁民を中心に起こった浜小屋保存運動であり、地元の高い意識が結実した結果と言える。

防衛 1

19 世紀に入ると外国船の日本への来航が活発化した。文政 8（1825）に「外国船打払令」が出され、それを受け天保年間（1830-44）に各藩で第一次の台場築造ラッシュが起きる。その最中の天保 5（1834）、津軽の袰月村に、捕鯨船乗組のアメリカ人が上陸、天保 14（1843）には鮫（八戸）沖に異国船が出現、3 日間停泊した。少し後年になるが、弘化 4（1847）、津軽の平舘村に捕鯨船乗組のアメリカ人が上陸、翌嘉永元（1848）には三厩村にも上陸している。こうした事態を受けて翌嘉永 2（1849）に平舘村に造られたのが平舘台場（外ヶ浜町、県史跡）A である。

平舘台場の特徴として、海岸に沿った南北 80mの土塁上に 33 本の松が植えられていることがあげられる。これは、最初に取り上げた平舘の松前街道松並木と深い関係がある。すなわち、台場を擬装するため、街道松並木と一体化して見えるよう松を植えたとされている。平舘台場は、また、わが国初の扇形をした西洋式台場でもあり、随所に工夫の跡が見られることでも知られる。